

スポーツ&レジャー
100年前の「運動遊戯」の思想

明治39年発刊の「遊樂雑誌」を手がかりに

西野 仁 (東海大学)

はじめに

明治39年3月20日に『遊樂雑誌 The Amusement』が創刊された。編輯者は大賀順治、発行所は近事書報社である。「発刊の辞」から始まり288ページのB5版の雑誌は、表紙が赤、青、黄、そして黒の多色刷りで、8ページにわたって口絵寫眞が載っており、値段は一冊25銭であった。この『遊樂雑誌』の表紙には、The Amusement. という英語名もついている。

今から20年ほど前に、横浜の古書店で偶然見つけた本雑誌の消息を、国会図書館をはじめ、近事書報社の所在地から出版社を訪ねてはみたが、手がかりは見つかっていない。しかし、文献^{1) 2)}によれば、『遊樂雑誌』は明治40年3月～5月に通巻3号が発刊されたとある。大宅文庫でも『遊樂雑誌』の創刊は明治39年3月と特定している。いずれにせよ、短期間の刊行であったようだ。



『遊樂雑誌』の発行所は東京市京橋區五郎兵衛町の株式会社近事書報社である。この出版社は明治38年7月に、『婦人画報』を発刊した。『婦人画報』は現在も続いているが出版社名は変わっている。ところで、この『遊樂雑誌』の社告では、『本誌は諸君の見らるる如く我邦運動遊戯界に於ける唯一の機関なり』と述べ、『各地方の運動界實況、競技批評及び新遊戯の方法、地方特殊の遊戯等は殊に諸君の寄稿を希望す』と寄稿を求めている。内容は、「野球」、「歌留多」、「釣」、「蹴球」、「弓術」、「闘球」、「音楽」、「能」、「お座敷芸」などさまざまで、ここでいう「運動遊戯界」は、スポーツとレジャーとを合わせ持つ「スポーツ&レジャー」³⁾の領域と酷似である。

本研究は、この100年前に発刊された『遊樂雑誌』の発刊の意図、内容と執筆者などをもとに、また、明治時代に発刊された『運動界』⁴⁾との比較して、どのような特徴をもった雑誌だったのかを明らかにしようとするものである。

遊樂雑誌発刊の辞

遊樂雑誌の「目次」「口絵寫眞」に次いで、次のような「発刊の辞」が掲げられている。

勞作ありて生活あり、而も遊樂なきの勞作は精神の消耗たらずんばならず。王侯と庶人とを問はず、男子と婦人と老と若とを問はず、一日の生活中、多少の遊樂を享有する能はざる人は不幸なり。人は遊樂の爲に活くるには非ずと雖も、又同時に人は澁面して泣面して生活せねばならぬ義務もなきが如し。以て本誌發刊の辭となす。

働くことだけの生活は精神をすり減らすことになりかねない。日常生活に楽しいことを行う能力を持たない者は、男女貴賤の別無く不幸だと断言し、遊ぶために生きるのだとは言わないまでも、何も面白くなさそうにまた泣き顔で生活をしなければならないわけではあるまいと論ずるこの思想は、Russell, B⁵⁾ や多田⁶⁾ らの著作を思い出させる。この考え方の根底には、仕事はつらく大変なものとの考えが強くあり、くつろぎや気晴らしを唱導する姿勢が強く伺える。

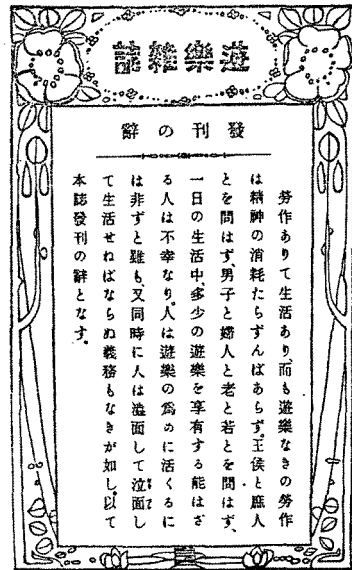
内容と執筆者

遊樂雑誌の目次は、次ページのようである。野球、歌留多、釣、蹴球、弓術、鬪球、音楽、能、お座敷芸、庭球、書画道楽、体操、欧州の運動界、運動界の近事、囲碁、活花、将棋、玉突、ボート、新遊戯、芝居と広範囲にわたる。これらの活動は、編集者の描く Amusement の具体的な活動だと解せよう。執筆者は、大学運動部長や選手、棋士や名手などの実在の著名人の他、いわゆる芸者衆や風流人たちではないかと想像され、実名とペンネームが入り混じっている。巻頭を飾る「安部磯雄」は、同志社大学を卒業後、アメリカやドイツの大学で学んだ経験を持つクリスチャンで、早稲田大学野球部の初代部長を務め、嘉納治五郎らとともに大日本体育協会を設立、日本野球殿堂入りした著名人である。また、橋戸は早稲田大学文学部哲学科学生時代ベースボール部に属し、後の早慶戦を仕掛けた人物で、全国中学校優勝野球大会(現・全国高校野球選手権大会)の運営に関わり、都市対抗野球大会の開催に尽力した。弓道の本多利實は、徳川幕府の旗本で、一高の弓術教授、東大弓術部の師範を務めた本田流の祖である。音楽について書いた栗島狭衣は新派の座長である。将棋の小野五平は 12 世名人であるとともに、日本チェス界の草分け的存在でもある。玉突き談の山縣五十雄は、東京帝大英文科卒で後に「ソールプレス」社長や外務省嘱託などを歴任した。ドミノとマトリアを書いた正岡藝陽は熱心なキリスト教徒で、大阪日報の主筆でもあった。表紙畫を描いた庄野宗之助は巴里博覧会出品の画家であり、庄野とともに挿畫を描いた三上知治は帝展特選受賞後、示現会創立会員で代表をつとめた。

遊樂雑誌の記事内容と編集の特徴

『遊樂雑誌』の記事内容は多岐にわたる。しかし、いくつかの特徴が見て取れる。

- 1) 掲載された活動が、広範囲にわたっている。
- 2) 「野球」のあとに「歌留多」があり、次いで「釣」というように、「洋」と「和」、「戸外」と「室内」など、交互に登場している。
- 3) 欧米のスポーツ活動の紹介と日本での普及の経緯と状況にページを割いている。
- 4) ベースボール、ラグビー式フットボール、テニス、ゴルフ、スキ・ランニング(スキー)、ボートなどのスポーツ種目に加え、ワグネル(ワグナー)、ウェーベル(ウェーバー)、ハイドン、モツァルト(モーツァルト)などの音楽家たちの名前と曲目がカタカナで紹介している。



目 次

野球	日本野球界の優勝盃 日本の野球界(上) 野球に就いての苦心及び米國の野球	早稲田大學運動部長 安部磯雄 X Y Z 早稲田大學選手 橋戸 信	2
歌留多	歌留多觀	綠 眼 兒	40
釣	三月の釣案内	石井 研堂	57
蹴球	ラグビー式蹴球競技 野球庭球及蹴球	草 菱生 早稲田大學運動部長 安部磯雄	70
弓術	弓術談	日置流名家 本田 利實	89
闘球	闘球雜談	烏 天狗	100
音楽	音楽素人觀	栗島 狭衣	116
能	經歷苦心談	梅若 實	126
お座敷藝	お座敷の遊び 拳のいろいろ 輕口の種々 順送りのいろいろ 八々(上) 口上茶番	ほ た に 止 丘 翁 わ か 葉 わ か 葉 弄 花 坊 五柳亭 徳升	147
庭球	日本の庭球界(上)	X Y Z	168
書畫道楽	廣山陽に偶文唄	古董 齋主	194
體操	ヴハードン氏の五分體操	白井 準繩子	207
歐洲の運動界			212
運動界近事		く さ 生	225
圍碁	圍碁實習	五段 廣瀬 平次郎	228
活花	活花	わ か 葉	236
将碁	将碁	九段 小野 五平	251
玉突	玉突談 紳士の遊戯	山縣 五十雄 双龍軒主人	253
端艇界	日本の端艇界	某選手 ABC	267
新遊戯	ドミノとマタドア	正岡 藝陽	274
芝居	芝居見物	わ か 葉	285
	綠蔭(表紙畫)	庄野 宗之助君筆	
	日本野球界の優勝盃 — 牛津劔橋而大學漕艇選手 — 老弓會大會 — 慶應義塾野球選手		
	英國の運動會 — 将碁界の巨人小野五平氏 — 早稲田大學野球選手 — 闘球と玉突		
	(以上口繪寫真版)		
	遊樂二十題(挿畫)	庄野宗之助氏 三上 知治氏	

5) 釣、歌留多、能、将碁、活花、書画など日本古来の趣味・芸術活動に加えお座敷芸を詳細にわたって解説している。

- 6) 玉突き、闘球、ドミノなどが新遊戯として紹介されている。
- 7) 名士と嗜好と題する 9 編のコラム、西園寺首相の盆栽と玉突、徳川家立の相撲と旅行、渋沢榮一の茶と囲碁などが挿入されている。

『運動界』と『遊楽雑誌』

『遊楽雑誌』が刊行されるほぼ 10 年前の明治 30 年 7 月に『運動界』⁴⁾が発行された。この『運動界』の英語標記は、The Athletic World が使われている。その名誉賛助員は、『社會に於ける地位高き貴顯紳士を推戴したる者』と、公爵、伯爵、子爵、陸軍大佐などに加え、嘉納治五郎、日高藤吉郎、坪井玄道などがある。発刊に際しては、「良国民を得んと欲せば、先ず盛んに我青年子弟に運動体育の事を奨励し、以って健康なる精神の宿る健康なる身体を得しむること最も大切なりといふべし」、『今の患なる優柔懦弱の風を移つし、かくて我國將來の継續者をして、剛健なる国民たらしめんことを期するものなり』と体育の奨励を挙げている。創刊号では、野球、水泳、ボート、柔道を取り上げている。しかし、その文調は報国的で好戦的である。

『遊楽雑誌』の英語標記は The Amusement であり、前述した発刊の辞や内容、文調からは、ヒューマニズムを感じさせる。執筆者の多くがいわゆる市井の人である点も、『運動界』とは異なる。

まとめ

『遊楽雑誌』は、雑誌名、発刊の意図、内容、執筆者などにおいて、多くの特徴を持つ雑誌である。扱っている内容も、その基礎にある思想も、いわゆる「スポーツ&レジャー」の領域と類似している。しごとが大事だと言われ続け、また社会がそれを疑いなく肯定していた 100 年も前に、「仕事も大事だろうが、生活を楽しむことも大事だ」と主張することを意図して、新しい雑誌を編集することは容易なことではなかったのではないかと想像する。Russell, B.⁵⁾ が、In Praise of Idleness (怠惰への讃歌) で、世界的に有名な同じような主張をする 30 年前に、日本にもその思想があったことは、特筆すべきことである。

- 1) 日本体育大学体育史研究室監修、復刻『運動界』解説、大空社、1986 年、p.8
- 2) 伊東明、日本における体育・スポーツ雑誌の歴史、上智大学体育 Vol.2、1969 年、p.26
- 3) スポーツ&レジャーの概念については、西野らが練った「東海大学スポーツ・レジャーマネジメント学科設立趣意書」には次のように述べられている。

『一般的にはスポーツは、制度化され組織化され、他よりも優位であることを求める活動を、また、レジャーは選択の自由性と内発的動機を特徴とする活動であると解釈されてきた。しかし、人々の楽しみの活動が多様化するにつれ、二つの領域の境界は次第に曖昧になってきており、キャンプや散歩、トレッキングやダイビング、釣り大会や健康フェスティバル、複合的な運動公園やコミュニティセンターなど、多くの活動や催事、施設などが峻別するよりは、「スポーツ&レジャー」として包括的に捉えた方が現実に即しているという考えが広まってきた。また、それは、「スポーツ」と「レジャー」を単に、「&」で繋いだというよりは、「スポーツ＝競技・勝負」「レジャー＝気晴らし・娯楽」という偏って定着した発想を脱して、「スポーツ」や「レジャー」を広義にかつ本来の意味に立ち返って捉えなおし、QOL や環境保護、伝統文化の再生などを含め、充実したゆとりある生活や社会の形成に資するために両者を融合して扱う領域を強調して指すための新たな一単語として使われはじめています。』

- 4) 運動界、運動界発行所、明治 30 年 7 月、p.1
- 5) Russell, B., In Praise of Idleness, Reprinted by Routledge, 1996 年、p.15、p.18、p.21
- 6) 多田道太郎、物くさ太郎の空想力、冬樹社、1978 年、pp.119-126